

# 動機の語彙論と知識社会学

——動機付与論から「動機論の動機論」へ——

伊奈 正人

## 1.

C. ライト・ミルズには二つの知識社会学があると言われる。一つは1940年前後の初期論考に書かれた言語社会的な知識社会学である。もう一つは、『パワーエリート』の大衆社会批判や『社会学的想像力』のアメリカ社会学批判における批判的な知識社会学である。両者のギャップ——論の隔たりや変化、とりわけ『性格と社会構造』の異様——は、ミルズ研究においてくり返し指摘されてきたことである。この論文は、両者を貫く再帰的・反省的な視点があることを仮定し、その抽出を目指すものである。

80年代以降、テキサス大学にミルズのノート、手紙、草稿などのコレクションが整備され、主としてアメリカ政治史・ニューレフト研究など歴史学の分野で研究が進展したことで、クロノロジカルな事実がいろいろと明らかになってきている。<sup>1</sup> 初期論考とその後の著作をめぐる執筆事情や影響関係が解明されることで、H・H・ガースとの共著関係などもほぼ確定され、初期の知識社会学においてミルズが展開した議論の貢献を検討することが可能になった。この論文は、まずこうした歴史学的な研究成果をレビューしながら、テキストクリティークを行い、初期の知識社会学の性格づけ、位置づけを明らかにすることを第一の課題と

---

<sup>1</sup> 先駆的な仕事として、Gillam1966がある。ギラムは、草稿や書簡の整理も後に行う。しかし、Aronowitz2004所収のいくつかの論文以外は仕事を公刊していない。史料研究として社会学者が行ったものとしては、Jones1977、Horowitz1983、Mattson2002、Oakes & Vidich1999、Summers2008、Geary2009などがある。このうちGeary2009は、史料収集、史料批判、注解、詳細な索引などの点で出色の作品である。2007年までの二次文献の詳細は、伊奈・中村2007の文献表を参照。

する。

第二に、この作業を踏まえた上で、二つの知識社会学を貫くものとして、「動機論の動機論」という再帰的な視点を抽出することを課題とする。<sup>2</sup> ケネス・バークから受けた影響の吟味を手がかりとして、この作業は進められる。<sup>3</sup> 今日でも評価の高い動機の語彙論（いわゆる動機外在説、動機付与論）は特にバークからの影響が顕著である。しかし、影響は初期の論考にとどまらず、晩年の社会学的想像力論<sup>4</sup>にまで、ケネス・バークの影響は及んでいるように思われる。

「動機論の動機論」という文言は、バークからの影響の要約を試みたものである。その定義、意味あいについては、本論のなかで論じてゆくことになる。ここでは副題に集約されている本稿の仮説について一言しておきたい。バークには、あらためて言うまでもなく、印象批評の批判を行った批評家という定評がある。『動機の文法』をはじめとする著作で展開されている動機論も、諸々の批評における作品モチーフを対象化する批評理論を確立するために構想された。こうしたいわば「批評の批評」という再帰的なモチーフと照らし合わせながら、ミルズの初期の知識社会学を読解することで、動機の語彙論がもつ知識社会学的、再帰的視点も解明されるのではないか。そして、動機付与論、モーティブ・トーク論<sup>5</sup>に限局されていた動機の語彙概念の解釈も、再帰的な観点から一新することができるのではないか。それにより、ミルズの初期知識社会学、階級三部作の大衆社会論、そして晩年の社会学批判が整合的に解釈されるのではないか。こうした仮説的な問いかけを基軸として本稿は展開される。こうした解釈の転換・一新という論文のモチーフを表現するために、動機付与論から「動機論の動機論」へ、という副題をつけた。<sup>6</sup>

論文の前半（2～4）では、歴史的な史料研究の成果を参照しながらミルズ

---

<sup>2</sup> 文芸社会学的なミルズ研究としては、Summers2007, 2008などがある。

<sup>3</sup> すでにケネス・バークの批評論のミルズへの影響については、伊奈2006で論じている。ただし、この論文は、「不調和によるパースペクティブ」(perspectives by incongruity) 論とミルズの世界観の想像力の関連に特化したものである。

<sup>4</sup> 晩年の社会学的想像力論に対するバークの影響については、伊奈2006で論じた。

<sup>5</sup> 言うまでもなく、動機付与論の意義は明白であり、それを批判しようとするわけではない。

<sup>6</sup> 本稿のアイデアは、日本社会学会編『社会学事典』（丸善 近刊）に「動機の語彙」、「社会学的想像力」という二つの項目を執筆した際に思いついたものである。当然ながら、内容的にも紙数的にも制約があったので十分な文献的な検討はできなかった。また二つの項目に関連づけて論じることもできなかった。本稿は、事典で解説した論点の実質的検討を目指すものである。

の論考のテキストクリティークを行う。<sup>7</sup> 論文の後半（5～8）では、こうした確定されたテキストに立脚して、動機の語彙論の知識社会学的な貢献について考える。<sup>8</sup>

## 2.

ミルズは1939年に「言語、論理、文化」、1940年に「知識社会学の方法論的な帰結」、「状況化された行為と動機の語彙」と知識社会学の論考をアメリカ社会学会のジャーナル ASR、ASJ に次々と発表した。冒頭でも述べたように、いずれもプラグマティズムの社会心理学とヨーロッパ的な歴史的、社会構造的視点を突き合わせながら、新しい知識社会学のモデルを定礎しようとしたものである。一方でミードやデュエイ、他方でウェーバーやマンハイムの議論を比較しながら議論は展開されている。こうしたミルズの初期論考が、長い間「忘れさられていた論考」であったことは否定できない。バーガーとルックマンは『現実の社会的構成』のなかで次のように言及している。「ミルズは初期の論考で知識社会学について論じている。しかし、解説的な議論で、知識社会学に寄与するところはない」(Berger & Luckmann 1966 p.11-p.12)。

バーガーとルックマンがここで言及しているのは、ミルズの初期論考やガースとの共著『性格と社会構造』のなかの自己論に関する部分である。ミルズは、ミードの一般化された他者の概念を修正し、選択された社会的部分と規定し直している。これは個人の生が社会全体の公共性に結びつかなくなった社会状況を見すえながら、細分化する生を社会構造的に解明する試みとして一定の評価を受けていた論点である。しかし、ミルズたちの議論は、フロイト主義における「重要な他者」の概念に明らかに影響を受けている。議論は解説の域を超えたものではない、という評価が覆されることはなかった。「親密な他者」などの概念をつかって、

---

<sup>7</sup> 2では、動機の付与論、動機外在説という画期的な着想を提示したものとしてミルズの初期論考に光が当てられるまでのコンテクストを簡単に整理する。その上で、初期論考と『性格と社会構造』との落差を検討する。3では、こうした落差に画期的な着想の凡庸化を見る見解、論点の移動を見る見解を検討した上で、議論の深化を解釈する可能性について問題を提起する。4では、ガースとミルズの共著関係に焦点をおき、テキストの落差を検討する。

<sup>8</sup> 5は、ミルズの知識社会学の論点整理とケネス・パークの影響の吟味を行う。6では、動機付与論という着想について、テキスト内在的に検討を行う。7は、パークの「批評の批評」との対比において、ミルズの動機論の再帰性を「動機論の動機論」という観点から論定する。

ミルズたちが議論を展開している点は、バーガーたちも一定評価している。しかし、まったく別の意味あいをもつ“Intimsphäre”との混同ということもあり、テクニカルタームとしては切って捨てている。

『ホワイトカラー』や『パワーエリート』といったベストセラーの著者であり、またニューレフトの先駆者として注目されていたミルズが書いた知識社会学の論考は、まったく無視されていたわけではない。むしろアメリカにおいては自明の前提とされていた公共性や理性などの社会構造的な根拠を問いかけるミルズの問題設定は、社会構造的な視点をもった相互行為論として、それなりの評価を受けてきた。<sup>9</sup> マルクス主義の社会科学にも一脈通じる面をもつミルズは、アメリカ社会学のなかでの例外的な存在として注目される存在であった。しかし歴史的、構造的枠づけという当時の時流にあった思想的にウケのいい問題に接続されるにしても、核心をなす着想が曖昧なら、知識社会学の議論としては通説のなぞり返しにすぎない、と言われてもしかたのないところである。

「忘れられていた論考」を発掘し、解説の域を出ないという評価を一新したのは、1968年のスコットとライマンによる動機の語彙論の再発見（Scott & Lyman 1968）である。評価されたミルズの着想は、動機付与論、動機外在説などとも通称されている。動機は、人間の心のなかのものが表出したものではなく、他者との関係において決まる外在的なものであり、状況に応じ、典型的なパターン（ないしはパターン化）の規則をもっている。そして動機づけというのは、動機付与による人間関係・社会秩序の修復・維持である。こうした仮定が、言語分析と結びつけられることで、語彙分析という研究手法が成立する。動機付与論は、人間心理・社会意識のアイロニーを解明する伶俐な道具立てを提供するものであった。こうして、モーティブ・トーク論という領域が開示され、動機付与のパターンが精緻に検討される（Blum & McHugh 1971、Hewitt & Stokes 1975ほか）。そして、差別、偏見、いじめ、自殺など、権力作用を実証的に解析し、社会の亀裂を鋭くえぐり出す議論を提起し続けている。<sup>10</sup>

---

<sup>9</sup> 日本では、船津1976の評価が先駆的なものである。

<sup>10</sup> 社会学史やモーティブトーク論の展開をサーベイした論文としては井上1997、そうしたサーベイを踏まえながら、現実の社会問題と対照させながら、動機付与論を体系的に再検討し、モーティブトーク論の批判的検討を行った論文としては藤原2008を参照。

### 3.

動機の付与論は、ミルズの論考を離れ、独自の専門的展開をみせているということができるであろう。本稿はミルズの論考に再び立ち返り、知識社会学的な再検討を行ってゆく。その際、大きな問題となるのは、テキスト間のギャップである。とりわけ動機の語彙論で最大の問題となるのが、ミルズが単独で執筆した動機論と、ガスとの共著『性格と社会構造』における動機論との落差である。双方ともに動機の語彙論を論じたテキストであることに変わりはない。そこには明らかに落差があり、前者で示されている着想は、後者においてはいささか凡庸化しているように見える。

ここで、テキストクリティークを二点行う必要があると考える。第一は、初期の論考と『性格と社会構造』との議論の変化について吟味することである。前者から後者への議論の変化を論じた代表的な論者は、西川珠代（西川1991）である。西川は、ウェーバーの行為論における動機理解との対比において、ミルズの動機付与という着想を高く評価する。ところが、初期の論考における動機付与論の布置連関を、ウェーバーの行為論にまで遡及して、図解・整理している。そして、『性格と社会構造』における見解の変化を明解に論定している。西川の論考は、単なる印象論にとどまらず、精緻な読解に基づき、理論的に議論の変化＝内在化＝凡庸化を立証しようとしている点で出色である。井上俊（井上1997）も、外在的動機の付与論という論脈において西川の指摘に言及している。

たしかにミルズの初期の論考は、“sociotics”という造語まで創り、思い切った言語論的な転換を標榜している。5で詳述するが、初期の論考においてミルズは、動機の他者性、外在性を論じた際には、社会的なもの、政治的なもの、制度的なものが語彙に内在しているとまで言い切っている。

初期の論考は、勢いでつい口に出たいいわゆる「予告編」にとどまる提起や指摘も少なくないし、未完成な部分も多い。しかし、根幹をなす語彙論の着想は鮮やかであり、また現代社会のアイロニーに対する洞察が随所に示されている。一方、『性格と社会構造』においては、動機の説明変数としての諸々の「外在するもの」（他者、言語、社会制度など）が歴史的、社会構造的な制度の社会心理学として網羅的に列挙・整理されているが、通説的・概説的なカテゴリー群へとアイデアが接続され、凡庸化しているようにも見える。そして、内面も社会も政治も制度も語彙のなかにあるという初期のラディカルな着想が希釈されるような印象を

受けることは否定できない。

こうした『性格と社会構造』＝凡庸化論とは別の解釈を提示することもできる。たとえば、議論の変化は、着想の曖昧化ではなく、力点の移動であるという解釈である。基本となる着想＝動機付与論に限定して言えば、『性格と社会構造』においても、それが放棄されているわけではない。井上俊も別の論考（井上2008 p.18）では、初期の論考と『性格と社会構造』で書いてある内容に違いはないとも言っている。

モーティブ・トーク論でも、ブラムとマクヒュー（Blum & McHugh1971）の場合は、レファランスに『性格と社会構造』のみを掲げている。論考は、スコットとライマンの指摘や言語行為論の展開を踏まえ、残存する内在説を批判し、精緻なタクソノミーを提起したものである。動機付与論の発想を発掘したスコットとライマンは、埋もれていた初期の論文に光を当てるといふ立論をとった。これに対して、ブラムとマクヒューのような類型論の下敷きとしては『性格と社会構造』の方が批判的検討に使い勝手がよいし、またその方が体系的な知見を得やすかった、と考えることもできる。凡庸に羅列されているかのような理念型の目録も、こうした批判の上に語彙の類型として解釈する余地は残されているからである。

さて、初期の論考と『性格と社会構造』における動機付与論の論点に差はないかどうか、ということについてはこの他にも議論の余地があると思う。しかし、仮に二つのテキストの論点に差がないとしても、この論文の主題からすれば、ミルズの全テキストを貫く語彙論について問いかけられなくてはならない。すなわち、内面も社会も政治も制度も「語彙のなか」にあるという初期の斬新でラディカルな着想、すなわち知識社会学を語彙論へと変換するという着想が、どのような意味あいにおいて、『性格と社会構造』、さらには大衆社会論、社会学批判に整合的へと接続され、堅持されているか、と。

このような問いかけにおいて要となるのが、語彙論という着想の再帰性である。5の「言語、論理、文化」を検討する部分で詳細は論じるが、語彙論の再帰性という着想は、初期の論考においても主要な論点は明示されている。『性格と社会構造』の類型論は、知識社会的に見れば、この再帰性を相関主義的に深化させ、類型化、さらには体系化がなされていると解釈することはできないか。<sup>11</sup> これは、本稿の論旨とも関わる重要な論点である。

ここで、相関主義的な省察とは、ミルズのテキストで用いられていることばで定義すれば、「語彙論への変換」という着想自体の構造的な根拠を問いつけるこ



とである。これは必ずしも安直な实在論への後退を意味するわけではない。「語彙論への変換を行う語彙」が含む内面的、社会的、制度的、政治的なものを問いかけること、という考え方もできるからである。このような考え方については、より再帰的に、「語彙論への変換の語彙論」、つまりは「語彙論の語彙論」を問いかけること、というような表現も可能であろう。

結論を先取りして言えば、本稿はこうした反省的、再帰的な発想にミルズの知識社会学の真骨頂があるという解釈に立ち、動機付与論や語彙論という着想の独自性をそこに見いだすものである。<sup>12</sup>バークの語彙論を「批評の批評」という観点から読み、ミルズの動機の語彙論を「動機論の動機論」という観点から解釈する理由もここにある。

ついでに付言すれば、見解の堅持か変化か、という問いは、ミルズが依拠したバークの『永続と変化』という書名を連想させる。そこで重要なのは択一の決着をつけることではなく、両者の弁証関係に着目しながら、対置の構図をよりきめ細かくニュアンス豊かなものにしてゆくことではないだろうか。この点については、7で論じることしたい。

#### 4.

論調の変化については、学説の変化ではなく、共著と単著の違いという観点から考えることもできる。この点で、第二のテキストクリティークが必要となる。すなわち、『性格と社会構造』におけるガスとの共著関係、ミルズの貢献の範囲を吟味することである。ミルズをめぐる史料研究<sup>13</sup>の成果は、共著関係を詳細に解明し、議論にほぼ決着をつけている。

初対面のとき師を前にして宙返りをしてみせたエネルギーなテキサス生まれの大学院生の逸話はつとに有名である。このエピソードを引用し、ガスとミ

<sup>11</sup> たとえば、社会構造論の「シンボル局面」論は、語彙論への変換の実体化（ガス＝ミルズの用語で言えば自律化）を相対化、相関化する着想と解釈することもできる『性格と社会構造』を、ウェーバーの局面（Sphäre ガス＝ミルズ訳では sphere）概念を要とする動機づけの語彙の体系として読解することも不可能ではないであろう。伊奈1991で不十分ながら局面概念を論じた。この点は稿を改めたい。注17、19を参照。

<sup>12</sup> もうひとつ付言しておきたいのは、一方で、ミルズは大衆論や社会学批判において、語彙分析を堅持し、駆使しているということである。そして他方で、ミルズは体系的な語彙理論を残すことなかったということである。7、特にNB23前後を参照。

<sup>13</sup> 注1を参照。

ルズの師弟関係がこれまで再三語られてきた。両者の関係は師弟関係と言って間違いないかもしれないが、公的な指導関係があったわけではない。ミルズのウィスコンシン大学での指導教員 (advisor) はハワード・ベッカーだった。ベッカーはドイツの理論社会学や知識社会学に造詣の深い社会学者としてアメリカの社会学会で強力なリーダーシップをとっていた。1939年に公刊された最初の論文「言語、論理、文化」(Mills1939)の学会誌投稿、掲載に、ベッカーは一定の役割をはたした。(Geary2009 p.26) 如才のないミルズは、冒頭でベッカーを引用している。

回り道になるが、このベッカーとの関係についても若干触れておく。ベッカーのドイツ社会学の学識は、当初ミルズを魅了した。しかし、ベッカーは当時の学会でも「総統」と呼ばれるような人柄であった。ヴィーゼを評価し、マンハイムを批判するベッカーには、大学院生がマンハイムに積極的な関心をもつことも、対立の材料となったようである。ミルズとベッカーの関係は悪化し、博士論文の審査時にはスラング交じりで悪口雑言のなじりあいを行うまでになっていた。

1940年のアメリカ社会学会でベッカーが発表したランドパークの調査論を批判するペーパー「社会学の実証主義の限界」の主要論点は、ミルズの未公開の草稿と同じであり、不満をミルズは友人にこぼしている。<sup>14</sup> しかし、ミルズとベッカーが主流派社会学の社会調査について、批判的な共通認識に立っていたとも解釈できる。(Geary2009 p.26-p.27)

さて、ガースとミルズの共著関係の検討に戻ろう。『性格と社会構造』の出版は1953年である。しかし、この本は教科書として企画された本であり、いろいろな事情で出版が遅れたものだった。その事情を含むガースとミルズの関係、その背景としてのアメリカ社会科学のコンテキストについて、オークスとヴィディクは一冊の本を費やして論じている。(Oakes & Vidich1999)<sup>15</sup> ここでは詳細多岐に渡るその逐一を検討することはできない。テキストクリティークに必要な範囲で、いくつかの論点を要約的に提示しておく。

オークスとヴィディクの著作において、叙述の基本構図になっているのは、ガースとミルズの対称的な人柄である。ガースは思慮深く、寡黙で、学問成果の公刊にも非常に慎重な人であった。これに対して、ミルズはやり手で、野心家であっ

<sup>14</sup> ゲーリーはこれを史料的に立証している。(Geary2009 p.228 N.B.53, 54)

<sup>15</sup> 同書には、ミルズとガースの協働、確執、役割分担、友情というようなものに至るまで、細かな索引がついている。



た、という。

人柄の違いは、すでにマックス・ウェーバーの翻訳書の出版においても、確執を生んだものであった。ミルズの洞察力に富んだことばの力は、少なからず翻訳に貢献した部分もあるが、共訳者と言うに足るドイツ語力があつたかは、しばしば疑義の対象となっている。<sup>16</sup> そもそもミルズはドイツからの亡命者であるガースの英語をチェックする役回りであつたのが、いつのまにか共訳者におさまっていた。ミルズは、ウェーバーの翻訳がアメリカ社会学における記念碑的業績になることを見抜き、少しでもよい出版社、少しでもよい条件で契約ができるように、丁々発止のやりとり、かけひきを精力的に行った。(Oakes & Vidich1999 p.17-p.21) 英米圏におけるウェーバー社会学のロビイストとも言うべき存在だったシルズに睥睨され、ガースはしばしば出版を逡巡したが、ミルズは強引に作業を進めた。ガースは学会や大学での地位保全のために、出版を認めるしかなかった。結果として、画期的なウェーバー選集の編訳者というガースの評価は不動のものとなった。

同様のことは、『性格と社会構造』の出版においてもくり返された。そもそも、この著作の原型になったのは、ガースのノートだったという。(Oakes & Vidich1999 p.60f.f.) 出版計画は1941年にはじまっていることは、作業記録などから明らかである (Geary2009 p.50)。ガースとミルズはファイルを共有し、ミルズが文章化することで、草稿ができあがり、ガースが校閲し、そして討議を重ねて著作化された。

全体として『性格と社会構造』には、文体的にはガースの影響が色濃く見られる。ミルズの論考に独特の破調の文体、ロジックのダイナミズムは、『性格と社会構造』においては影を潜め、いかにもガース独特の冷静沈着で、しかしいささか丁寧すぎる説明が随所で行われている。歴史的な事実を延々とならべ、多様な学説を博引旁証し、事実と理論を往還しながら執拗な例解や類型化が淡々とくり返される。結果として、洞察に富んだ力動感のあるイシュー、切っ先鋭い概念編成の論理は見えにくくなっている。

ガースとしては、自分の単著も同然、くらのつもりでいたようだ。ところが、契約の進行を見るとミルズとの共著になっていて、自分がセカンドオーサーにな

---

<sup>16</sup> Mills1940b で、ミルズはウェーバーの動機論をドイツ語原典から原文のまま引用するということをしている。

りかねなかった。かつての教え子は、『ホワイトカラー』というベストセラーを世に送り、知識人としての地位を確立していた。自分はウィスコンシンにとどまり、地位保全の必要があった。さすがにガスは怒って、ガス&ミルズという順序が確定した。『性格と社会構造』はテキストとしては成功したとは言い難いが、多くの読者を得て、版を重ねた。<sup>17</sup>

オークスとヴィディクは、ガスを、著作でも講義でも、自分の知を作品化することが上手くできずに終わった社会学者として描いた。他方、ミルズについては、ガスの思想を希釈し、縦横無尽に駆使して自らの作品を生み出した社会学者として描き、ガスの思想をポピュラー化した社会学者という以上の評価を与えていない。しかし、ゲーリーは、それはいささか一面的な評価である、と批判している。(Geary2009 p.49)

ゲーリーによれば、ガスに会う以前にマンハイムに関する独自の解釈も確立していたという。実際ミルズは、「言語、論理、文化」においてマンハイムやドイツの知識社会学について論及を行っている (Geary2009 p.229)。『イデオロギーとユートピア』の英語版が出版されたのが1936年であり、マンハイムの議論は英米圏の社会学者たちの大きな注目を集めていた。さらに、ミルズは、動機の話彙論 (Mills1940b)、マンハイム論 (Mills1940a) を、1940年晩秋までに執筆している。上でも述べたように、実際ガスがウィスコンシンに赴任したのは、ミルズが博士課程の最終学年にあたる1940年の秋であった。(Geary2009 p.229) この事実により、間接的にはあるが、初期テキストがガスとは独立に書かれたものであることがほぼ確定される、と言ってよいだろう。

マンハイム論をミルズが発表したのと前後して、マンハイムの門下生で、アドルノ、ホルクハイマー、レーデラー、アルフレート・ウェーバー、アレント、エリアス、スパイアらとともに仕事をし、あるいはともに学んだ経験を持つガスと、ミルズは出会った。ベッカーとの幸福とは言い難い師弟関係を考えると、ミルズの心情とガスへの期待は想像に難くない。

ガスは、講義がものすごく下手だった。歴史的事実と理論的類型をひたすら

---

<sup>17</sup> この他にも、『パワーエリート』における階級、地位、権力、職業という権力をめぐるフレームワークも、ウェーバーの権力論読解に基づいたものであり、『性格と社会構造』で理念型として説明されている。来日して一橋大学に滞在したおりも、『パワーエリート』の基本的な着想は自分の貢献であると、ガスは語っていたという。(滞在時世話人の1人だった古賀英三郎氏からの聞き取りによる)。

メリハリなく語る講義は、けっして大げさではなく、地位保全が必要なくらいの下手さだった。ガースの講義はほぼすべての学生たちを当惑させ、たちまち当惑は落胆、失望へとかわった。ところがミルズは、ウィスコンシンで聴く価値のある講義はガースのものだけだと、級友だったD・マーチンデルに興奮気味に語ったという。(Oakes & Vidich1999 p.2) ただし、ミルズはガースのクラスを受講していないことも同時に確認される必要があるだろう。(Oakes & Vidich1999 p.2、Geary2009 p.49)

いずれにしても、ミルズとガースの協働は開始された。ミードとフロイトを重ね、デュエイとマンハイムを重ね、ヴェブレンとウェーバーを重ね、ミルズは学んだ。そして、『性格と社会構造』という成果が生まれた。フロイトやフロムの自我論、ウェーバーの行為論、マンハイムの知識社会学、ウェーバーやマルクスの社会理論に関して、ガースの造詣は間違いなく圧倒的なものであったに違いない。そしてミルズは、『パワーエリート』、『社会学的想像力』、『第三次世界戦争の原因』などの著作で、『性格と社会構造』で展開された知見を用い続けた。

しかし、プラグマティズムの社会心理学の限界を、ヨーロッパの知識社会学、歴史的な社会構造論に学びながら批判し、新しい知識社会学を創るというミルズのモチーフは、ガースの学識に解消されるものでもない。『性格と社会構造』の社会構造論の長大な記述に分析的なメリハリをつけるのに、ミルズの自己論や行為論の再帰的な着想は少なからぬ貢献をしているとも言える。<sup>18</sup>

ガースとミルズの間を考えると、とりわけ重要なのは、まったく違う場所で学んだ2人が、共通のコンテクストと向き合っていたことであろう。工業化をもたらした近代の枠組は、20世紀への転換期に、貧困というリスクと対峙することになる。ファシズム、世界戦争、社会主義、人間疎外などの問題が顕在化し、人文社会科学は人間の暗部、社会の暗部と対峙する。新世紀における世界史の担い手を自負するアメリカにとり、科学技術発展を踏まえた新しい枠組を準備することは急務であった。20世紀のアメリカの主流派社会科学は、帰依できる絶対的な説明原因を否定し、臨機応変でフレキシブルな関係の編成を可能にする価値自由なフレームワーク——社会制御と社会調査——を探索した。それはイデオロギーを超克した科学的な社会制御の道具立ての探索であった。ガースも、ミルズも、さらにはベッカーも、ヨーロッパの知識社会学的な反省的知性に学び、価値中立

<sup>18</sup> これについては、伊奈1991で詳述したので、くり返さない。注11、19も参照。

の社会科学という主張の背景にあるイデオロギーを読み解く。そして、閉塞するヨーロッパ、最終決着としてのアメリカへという図式を相対化した。

## 5.

以上でテキスト批判の作業は終わる。ミルズは生涯に出会った誰よりも大きな影響をガースから受けた。しかし、ミルズがガースに出会う1940年秋以前に執筆していた知識社会学の論考はミルズ独自の貢献である。そこでミルズが提示した着想の影響は『性格と社会構造』の性格構造論のみならず社会構造論にも及ぶ。他方、フロイト、フロム、アドルノらから深く学んだガースの貢献も、社会構造論にとどまらず、性格構造論にも及ぶ。ミルズとガースの共同作業と確執は、アメリカとヨーロッパが直面していた問題に照らし、社会科学のなせめぎ合いというコンテクストにおいて理解されるべきである。以上が、3.4で行ったテキスト批判の要旨である。

次に、本論文の第二の課題であるミルズの知識社会学の検討に移る。「言語、論理、文化」、「知識社会学の方法論的帰結」という二つの論文のテキストに即した内在的検討は他所（伊奈1991他）で行ったのではここではくり返さない。ここではその検討の結果を箇条書き風に要約することから作業をはじめ。そして、この要約を踏まえて、再帰性と関わる論点をピックアップし、テキスト内在的に詳述してゆく。

まず、ミルズはプラグマティズムの社会心理学から学び、この方法を知識社会学に生かそうとした。プラグマティズムからの影響を、次の三つの論点に要約しておく。

第一に、ミードやデューイのプラグマティズムにおける実体排除の考え方である。プラグマティズムは、自己や動機といった「心理的なもの」を観察不可能な実体的で絶対的な説明変数から説明することを批判した。実験心理学の装いを施しても、統覚量（apperceptive mass）といった観察不可能な思弁的概念を設定するヴェント的な立論は批判された。

第二に、観察可能な外在的な説明変数としての言語への注目である。実体排除の考え方それ自体は行動主義心理学において提示されたものだった。しかし、刺激反応系に固執するならば、動物と人間を同列に扱うか、人間性の論定に思弁的な変数を忍びこませるかの択一になるとミードは批判している。かくして、観察

可能な社会的、人間的な刺激として言語が注目されるに至る。

第三に、ジェームスやデューイにより意識＝観念構成説への批判として提起された意識＝機能説への注目である。これは、一定の関係をなす全体（意識、集団、組織、システムなど）のなかで変化する要素的部分（観念、欲求、役割など）のはたらき（function）に着目することである。これにより機械的な対応や集計・構成により部分と全体の関係を説明することは打開される。プラグマティズムの社会思想は、ここから機能主義的な社会制御の考え方を彫琢する。ミードは、手のはたらきなどに着目しながら、自在な社会制御の自省性、再帰性に着目した。

こうしたプラグマティズムの知見は工業化の進展のなかで時代遅れのイデオロギーになったので批判されなくてはならない、とミルズは考えた。その判断を与えたのが、マンハイムの知識社会学であり、ウェーバーの政治社会学であった。そして、ミルズはプラグマティズムの批判的検討の上に、新しい知識社会学を構想した。その着想を三つの論点に整理しておく。

第一に、ミルズは自省的な人間存在が、全体社会を包絡するような公衆性を保持しているという知見には立たない。ミルズは、ミードの一般化された他者概念の全体性を批判し、選択された社会的部分として規定している。そして、細分化される現況を見ずえるために歴史や社会構造などの諸カテゴリーを動員することを主張する。

第二に、価値自由をめぐる立論にミルズは注目した。実体排除や機能主義の発想に立つことにより、思弁的な発想が否定され、価値中立的な最終決着が得られるという考え方もある。これに対して、こうした決着においても「隠された次元」において再実体化が発生し得ること、中立を志向すればするほど実体化はより深刻な問題になり得る場合があることを洞察し、その実体化のメカニズムを対象化しようとする考え方もある。ミルズは後者の考え方を、マンハイムやウェーバー

---

<sup>19</sup> 『性格と社会構造』では、再実体化は自律化として用語化されてゆく。ミルズはパーソンズの価値論を批判した。パーソンズは、アメリカ社会の多元的民主主義を前提にし、秩序を強引に導き出し、制御しようとしている。社会において秩序が正統化されるメカニズム、個人がそれを受け入れるメカニズムについては、議論が省かれている。議論をすれば、絶対安心とされているアメリカの民主主義体制に思わぬ亀裂が見つかる可能性があるからである。可能性を覆い隠せば、秩序への安心は保たれる。秩序は——論理的には——崩壊しないことになる。だから強引に規範的な議論をするのである、と。パーソンズの議論は、自律化する「規範的価値」、「正統化の象徴」の展開として社会秩序が導出されるという点にポイントがある。対して、ミルズは、自律化、正統化、規範化などのパターンを類別することこそが大事であると考えた。パーソンズのたどり着いた決着は、自律化のパターンの一つにすぎない。自律化の一パターンから強引な抽象論議で秩序を導き出すのではなく、さまざまな抽象レベルを行き来することが重要だとミルズは考えた。

に読み込み、変換と実体化の社会理論としての再帰的な知識社会学を構想した。<sup>19</sup>

第三に、ミルズは、知識社会学の要諦となる外在的な説明変数として、歴史的な社会構造、社会制度を視野に入れつつ、分析の焦点として、言語を考えた。ミルズは、語用論の次元としての言語分析として“sociotics”を構想した。分析の焦点は、言語による思考の枠付けである。しかし、他方で「潜在的なもの(latency)」として価値次元の問題があることに、ミルズが注目していることは、注意されてよい。デュルケム派の人類学者グラネが、中国語彙における豊富な価値次元を論じていることに着目し、ミルズは議論を展開している。

こうした知識社会的な論点の彫琢において、ケネス・パークは重要な準拠点を与えた。パークもミードやマンハイムに学びながら、シンボルの規範構造について考えた批評家である。パークの次のような時代認識はミルズのそれと合致する。「ミードの社会心理学の全体の調子は進歩と進化を信じていた幸福な時代の未来洋々たる気分と軌を一にしている。ここでは問題解決者としての人間が、それぞれの解決がまた新しい問題の基礎となる事態をホイットマン的な悦びをもってながめる」(Burke 1941a p.381= 森常治訳1974 p.324)。

ミルズへの影響は、言うまでもなく動機の語彙論文(Mills1940b)に顕著である。しかし、1939年の「言語、論理、文化」にもすでにパークの影響を読み取ることができる。ミルズがパークを引用しているのは、上記の第三論点、言語の潜在的次元にある価値構造との関わりである。ミルズが注目しているのは、ことばの潜在的次元には道徳的な価値づけの体系があり、その規範構造が道徳的な奨励とサンクションを与えるという点である。こうした道徳的なウェイトづけという観点からパークが示した洞察を、ミルズは引用している。「物とうごきの名称は善し悪しの言外の意味をこっそり持ち込んでいる。名詞は一種の見えざる形容詞を伴いがちであり、動詞は見えざる副詞を伴いがちである」。(Mills1939→1963 p.433 = 佐野勝隆訳1971 p.341) ミルズがグラネに注目したのは、こうした価値次元を中国語語彙が多く含んでいることを、考察しているからである。ミルズ自身の論を展開している部分を引用しておこう。

集団に共通するシンボルを利用することで、はじめて思考者は考え、伝達することができる。社会的に作り上げられ、維持されている言語が暗黙の制裁と社会的評価を体现する。言語カテゴリーを習得することによって、われわれは集団の構造化された「風習」を習得し、言語といっしょに、それらの「風習」の価値内



容を習得する。われわれの行動と知覚、論理と思想は言語体系の統制下に入る。言語にしたがって、われわれは一群の社会規範と価値を習得するのである。語彙とは単なる単語の連鎖 (string) ではない。そのなかには社会的織地 (textures) —制度的、政治的座標— が内在している。語彙の背後に一連の集合的行為が存するのである。(Mills1939→1963 p.433=佐野勝隆訳1971 p.341)<sup>20</sup>

ミルズは、語彙の体系に照準し、言語=行為という観点から思考の座標軸をモデル化している。ミルズのモデルは、思考を根拠づける潜在的次元、「隠された次元」としての潜在的パターン=文化に着目するところに特徴がある。論文のタイトルが「言語、論理、文化」となっている理由もここにある。I・A・リチャーズを参照しつつ、ミルズは思考の語彙が、社会的な目的のためにいくつかの要素を「隠す」機能を持っているという仮説を提示している。(Mills1939→1963 p.436=佐野勝隆訳1971 p.342)

中国の伝統的な社会において、年齢とそれに対する尊敬が密接不可分のものであり、ことばとしても区別がない、というリチャーズの分析にミルズは着目する。年齢にも高齢者に対する尊敬にも同じ単語が用いられる。こうした「曖昧語」は、潜在する社会の基本的な価値づけを絶対化する傾向がある。そうミルズは言っている。(Mills1939→1963 p.437=佐野勝隆訳1971 p.343) 逆に、高齢者への尊敬が薄れてくれば、加齢と尊敬の語彙は分析的に区別されるようになる。

ミルズは区別の欠如から、思考の枠づけを読み解くと同時に、「隠す」こと・曖昧化/顕在化・区別という語彙の力動から、社会の変化、思考の変化、文化の形成を説明する。例としてミルズは、C・E・エアーズ (Ayres) によりながら、ビジネス文化—ヴェブレンの言うビジネスの論理、セールスマンシップ、—の形成のなかで、曖昧語である「資本」が用いられるようになったことをあげている。すなわち、複式簿記の定着により、マネーゲームが自己目的化し、絶対化してゆくにしたがい、「資本」という語彙が汎用されるようになった。そうミルズは指摘している。<sup>21</sup>

ミルズの提起した語彙分析のモデルは、このように潜在する「意味のニュアンスと価値」、意味の織りなし、綾、含みなどを読みほどこきながら、思考者の「論拠」

<sup>20</sup> ミルズからの引用は、邦訳に準拠するが、訳文は適宜変更した。

<sup>21</sup> エアーズは、ミルズのテキサス大学での指導教員である。

(rationale) を考察する。(Mills1939→1963 p.434=佐野勝隆訳1971 p.341) ミルズは、リチャーズ、グラネ、エアーズ等を引用している。思考＝行為＝言語の価値づけという観点から見ると、ケネス・バークの影響が重要なものであることも確認しておきたい。そして、バークの影響下に、こうした一種の言語＝行為論的な知識社会学を動機論として彫琢したのが、動機の語彙論である。

## 6.

論文「状況化された行為と動機の語彙」(Mills1940b)は、ヴェント的な内観(introspection)論への批判に方法論的な転換を見ることから書き始められている。議論の背景にあるのは、上述したミードの行動主義的な知見である。ミルズは、人間の内側に行為の原因“Why?”を問いかける動機論を批判し、行為の状況がどのように社会的に説明・納得されるか“How?”を問いかけ、人間の外側から付与される動機を観察する動機論を対置している。再三触れたように、動機外在説、動機付与論などと通称される議論である。

ミルズ自身言うように、基本の着想はケネス・バークの『永続と変化』に追うところが大きい。同書には「動機と感情の語彙」という表現がすでにある。(Burke1935 p.35→Burke1989=森常治訳1994 p.205) バークも、行為の原因を「人間の内側」に見る立場を批判し、「動機を状況として検討」する。こうした知見は、ウィリアムズ・マーストンの「統合心理学」の貢献である、とバークは言っている。(Burke1935 p.34→Burke1989=森常治訳1994 p.204)

「人間の外側」から動機を考える場合、ポイントとなるのは動機の伝達と解釈、動機付与の論定である。その要となっているのが、動機とは意味を囲い込む「状況の速記用語 (shorthand term)」(Burke1935 p.29→Burke1989=森常治訳1994 p.199)である、という着想である。ミルズは、バークの議論を要約するのは次の一文だ、と言う。「動機を反省するわれわれのことばは、あい矛盾し衝突する刺激の典型的なパターンのおおまかにして、速記的な描写である」(Burke1935 p.30→Burke1989=森常治訳1994 p.200, Mills1940b p.441→Mills1963=田中義久訳1971 p.346)。<sup>22</sup> 当時の行動心理学は、生理学の成果なども踏まえながら、動機を刺激－反応の複雑な連鎖として捉えようとしている。この連鎖は逐一説明さ

<sup>22</sup> 訳文としては、ニュアンスがくっきり表現された森訳に準拠した。

れることはなく、パターン化された語彙により「おおまか」に解釈、説明される、としたところがパークの議論のポイントである。こうしたアイディアにより、「人間の外側」にあるシンボル世界（G.H. ミード）を観察する語彙論が開示された。

動機は状況伝達の「合いことば」である、とミルズは言う（Mills1940b → Mills1963 p.443＝田中義久訳1971 p.347）。行為の状況には、状況ごとに、動機の間いかけと応答があらかじめルール化されている。動機の語彙論は、このルール化された動機の付与を考える。円くおさめるためには、本心を抑え、意に沿わぬ「合いことば」でワケを説明しなければならないこともある。犯罪の取り調べなどでは、無理矢理自白させられた型どおりの動機こそ本心だった、と容疑者が思いこむことすらある。こういった皮肉や逆説に満ちたさまざまな人間事象の観察と分析が、動機付与の着想により、可能になる。

次にミルズはこの知見をウェーバーの理解社会学と関連づけようとする。有名な動機の定義をミルズは引用している。

「動機」とは、行為者自身または観察者にとって、態度の有意味な「根拠」として現れる意味連関のことをいう。「有意味に適合的」とは、態度の成素間の関係が、われわれの平均的な思考習慣および感情慣習からして、典型的な（われわれはこれを正しいと言っているが）意味連関として肯定されることを言うべきである。（Mills1940b → Mills1963 p.443＝田中義久訳1971 p.347）

動機の語彙論と同様の着想は、行為の社会的意味理解に着目したウェーバーの動機論にもある、とミルズは言う。そして、ウェーバーの行為の動機的理解という知見を用いて、「合いことば」としての動機を定義している。ミルズは次のように言っている。

マックス・ウェーバーは、動機とは意味の複合体である、と規定する。意味の複合体とは、行為者自身もしくは観察者にとって、その行為のために適切な根拠として映るものである。このような見解によって捉えられる動機の側面は、その本質的に社会的な性格である。十分な、あるいは、適切な動機とは、それが他者のものであると行為者のものであるとに関わらず、行為やプログラムについて問う人を満足させる動機のことである。ある状況におかれた行為者や他の成員にとって、動機は、一つの合いことばとして、社会的・言語的行為に関する問いへ

の、疑問の余地のない解答として役立つ。(Mills1940b → Mills1963 p.443=田中義久訳1971 p.347)

ミルズは、動機がどう問いかけられ、状況がどう意味づけられ、行為がどう納得されるか、を観察しようとした。動機の語彙は、先を読んで戦略的にやりとりを行い、いざごぎのときは修復を行う制御的なはたらきをする。これは、ことばの「制御的機能」と呼ばれた。

言い訳や正当化は、中小の集団に限定して論じられているわけではない。制度や体制を変えなければ、納得=正当性が得られない場合もある。パークと同様、ミルズの動機の語彙論は、集団や社会の維持ばかりではなく、変革や歴史変動も視野に入れていた。ミルズも、パークも、ミードの楽観的な秩序観の批判者であり、動機の語彙を全社会に一般化され、共有されているものとは考えていなかった。ミルズは、動機の語彙が、集団や時代によって異なるものであるとし、制度的な正当化パターンの類型化を提起する。

## 7.

次に、ミルズの動機論と知識社会学の関わりについて論じることにした。言い訳や正当化などの根拠づけは、知識社会的な問いかけである。しかし、ミルズはウェーバーの原典を訳出せずドイツ語原文のまま引用し、それと自説を関連づけるところまでで筆を止めている。「行為者自身または観察者にとって」というしばしば問題となる箇所にも一切注釈はつけられていない。

これに対して井上俊は、ウェーバーとミルズでは明らかな違いがある、と言う。そして、シュッツのウェーバー批判に照らし、ウェーバーの理解社会学と比較して「動機外在説」がより明確な知識社会的視点をもっていることを指摘している。ウェーバーは、客観的な観察者を状況の外におき、行為者の「内的動機」を科学の類型で因果的に理解する。対して、ミルズは、観察者と行為者を同一状況におき、日常の動機の語彙を介した外在的シンボル世界の相互行為によって動機の意味が構成され、付与されるのを考察する、と。(井上1997 p.25)

はたして、ミルズは、日常生活の動機の語彙と、哲学、心理学、精神分析学、社会学などの学問用語とを、シームレスに、動機の語彙論で説明しようとしている。ミルズは次のように言う。

言語的かつ社会的な事実の領域を説明できる見通しを与えるだけでなく、この動機論のいっそうの利点は、それによって、われわれが、動機づけに関する他の理論（ターミノロジー）を社会学的に説明できるという点にある。これは知識社会学の課題である。(Mills1940b → Mills1963 p.450＝田中義久訳1971 p.354)

ターミノロジーの一例として、ミルズは、フロイト主義の「ほんとうの動機」、深層の動機などについて、検討を加えている。「ほんとうの動機」は一方で、動機付与論のアイロニカルな切れ味の例解としてよく用いられる議論である。犯罪、自殺などの問題が起こったときに「ほんとうの動機はなにか？」と問われる。しかし、本人も含め、誰も「ほんとうの動機」はわからない。状況が整理、説明され、伝達、納得されたとき、それが「ほんとうの動機」となる。動機の語彙とは、状況の意味を象徴し伝達する戦略的なことばのセットである、と。

しかし他方で、ミルズは、「ほんとうの動機」論において、フロイト主義的な深層心理学の知見を批判的に検討している。「ほんとうのこと」や深層への問いかけは、5で述べた「隠された次元」、潜在的な価値規範への問いかけでもあることには、十分な注意がはらわれるべきである。このケネス・パークの視点に基づき、一定の根拠づけを絶対化する議論に知識社会学的な批判を加え、再帰的な立論を行うところに、ミルズ知識社会学の最大の特徴がある。5では、そう論定した。

ミルズはフロイト主義的な動機の語彙が、「強い性的志向をもつ上層ブルジョワの指導的な集団の動機論」であると言っている。(Mills1940b → Mills1963 p.450＝田中義久訳1971 p.354) この他ミルズは、マルクス主義の動機論、経営者側の動機論、現代社会の快樂主義的な動機論などに言及している。

マンハイムの相関主義に照らし、生活や学問におけるさまざまな動機づけの論理（理由・原因・根拠づけの意匠、ルール化）を、状況、集団、制度、時代などの違いにより、動機の語彙論でタイプ分けすること。こうした試行を「動機論の動機論」の構想と呼ぶことにする。この「動機論の動機論」という構想にもパークの影響がうかがえる。これについては、注6で示した事典的な論考で、詳述した。重複するが、重要なことなので、説明をくり返しておきたい。

『恒久と変化』は、「あらゆる生の作品性」という観点から批評概念を社会学的に拡張した著作である。批評の方法は、「訓練された無能力」のように、ある単語（「訓練」）を、不敬だが啓示的な文脈（「無能力」）へと変換し、隠喩化するこ

と＝同書の鍵概念「不調和によるパースペクティブ」である。

隠喩は、「作品としての生」の動機＝モチーフを批評する際に用いられる「喜劇化」の方法である。バークは、動機を単一の隠喩に変換・還元するのではなく、隠喩を重ね、類型化する「批評の批評」を提起した。バークは、胚胎されている批評の形式性、原型性を仮定し、それを解明することで独自の（批評の）批評論を提示した。そして、素朴な印象批評と一線を画した。こうしたバークの批評方法は、ミルズ知識社会学の構想と一定重なるものである。ミルズは知的な洞察や根拠づけの語彙の「隠された次元」への問いかけを行った。

あらゆる洞察や根拠づけはそのなかに固有の盲点を含む。一定の変換は、一定の可能性から隔離する。たとえばお金、権力、イデオロギーなどは、問題を鮮やかに変換する。しかし、フェティッシュに暴走することで、他の解決は隔離される。しかも、絶対化されると曖昧化されて、隠される。そこで、バークは、問題の一元論的解決を批評するため、「喜劇、滑稽化」によるレトリック戦略を駆使した。それを支えたのが変換の原型構造の洞察と定式化（たとえば動機の文法）である。

バークは、激しいことばで偶像破壊を続けたヴェブレンに学び、両極端の意味をもつことばを対置するオキシモーロンという修辞法を用いている。ミルズも、ヴェブレンの修辞法やケネス・バークの「不調和によるパースペクティブ」論から学び、オキシモーロンを多用した。対極を示すことで想像力は活性化する。極端な形態を考えたり、まったくの反対物をも想定したりすることで、「思ってもみないこと」や、「隠された次元」が開示し、啓示的な判断が得られる。

こうして再帰的な語彙論としての「動機論の動機論」は、『社会学的想像力』へと接続される。ミルズの著作の狙いは、こり固まった状況判断を変化させることだった。多元的国家を自負するアメリカにおいてファシズム的な権力一元化はまったく関わりのないこととして考えられていた。自由、理性、多様性などの語彙により、そういう素朴な考えを絶対化し、隠しているアメリカ社会学を、ミルズは語彙分析を駆使して分析し、「隠された価値づけ」を対象化して、批判している。<sup>23</sup>

『ホワイトカラー』で消費生活を享受し、陽気に楽しく暮らすアメリカのホワ

<sup>23</sup> 伊奈・中村2007は、モチーフとなるピボットを、異化と同化、概念的思考、経験調査、科学の実用性と中立性、予測と制御、科学の探求モデルとリアリズム、多様性、歴史的特殊性、時代認識、公衆と政治、知的職人性という11個に整理し、このピボットに即して『社会学的想像力』が目次立てられていることを論じた。



イトカラーを描き、公衆とはほど遠い「陽気なロボット」であると批評した。ミルズは、自ら表紙の写真で戯けてみせ、ウィットに富んだ筆致で「不安なアメリカ人」を描いた。『パワーエリート』は、多元的に機能分化することで巨大な可能性を獲得する一方で、権力集中が盲点となっているアメリカ社会を描いた。こうしたミルズの「人間喜劇」(バルザック)は、ファシズム社会とアメリカ社会の類似をえぐり出し、戯画化し、状況判断の変更をうながすものであった。

## 8.

以上、2～4では、ミルズの著作のテキストクリティークを行い、テキストの位置づけなどを論定した。5～7では、動機の語彙論の知識社会学的特徴を明らかにし、その再帰性を論定した。そして、ケネス・バークと対照させることで、「動機論の動機論」という再帰的な視点を抽出した。それは芸術、科学、日常的な生活の区別なく、シームレスに生の作品性、生のモチーフを問うものであった。「動機論の動機論」は、「隠された次元」における絶対的な価値づけをえぐり出し、類型的な理解を目指す。それは、動機付与論でも、大衆社会論でも、社会学批判でも、アイロニカルな「人間喜劇」を描き出すのに用いられた。

ケネス・バークは作品化の原型構造を定式化した動機の文法論などを提示することで、「批評の批評」を展開し、印象批評の批判者という定評を確立した。一方、ミルズの「動機論の動機論」は、共著『性格と社会構造』における、一時代的分節化ばかりが目立つ、不十分な教科書的整理をのぞけば、体系化されていない。注17、19で触れた局面論の着想も十分に展開されてはいない。実体化の原型構造は理論的著作に結実することはなかった。ミルズの批評的な努力はむしろアメリカの社会や社会学の「人間喜劇」を描く「批評としての社会学」に注がれた。こうしたミルズの軌跡は、ミルズ知識社会学の性格と課題を明示しているように思われる。論じ残した点は多いだろうし、論証が十分でない点もいろいろあろう。しかし、動機付与論から「動機論の動機論」へという展開、動機の語彙論の再帰的視点についてはそれなりに素描できたのではないかと思う。<sup>24</sup>

<sup>24</sup> 付言すれば、「批評としての社会学」という論点が開示することで、中内敏夫の言う「ポイエシスの学」(中内2005)という観点からミルズ社会学を読解する、というアイデアが喚起される。これは公衆社会学(public sociology)の重要な観点となるように思われる。これについては、稿をあらためたい。

文献：

- Aronowitz, A. ed., 2004, *C. Wright Mills, I-III*, Sage.
- Berger, P. & Luckmann, T., 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise on the Sociology of Knowledge*, Anchor Books.
- Blum, A. F. & McHugh P., 1971, "The Social Ascription of Motive," *American Sociological Review*, 36 (1) :98-109.
- Burke, K., 1935, *Permanence and Change*, New Republic→1954, University of California Press.
- , 1937, *Attitudes Toward History*, University of California Press.
- , 1941a, *The Philosophy of Literary Form*, Louisiana State Univ. Press → 1973, University of California Press. (=1974, 森常治訳, 『文学形式の哲学』国文社.)
- , 1941b, *A Grammar of Motives*, University of California Press. (=1982, 森常治訳, 『動機の文法』, 晶文社.)
- (Gusfield, J. R. ed.), 1989, *On Symbols and Society*, University of California Press(=1994 森常治訳, 『シンボルと社会』法政大学出版局.)
- 藤原信行, 2008, 「『動機の語彙』論再考——動機付与をめぐるマイクロポリティクスの記述・分析を可能にするために——」『Core Ethics』vol. 4 立命館大学.
- 船津衛, 1976, 『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣.
- Geary, D., 2009, *Radical Ambition: C. Wright Mills, the Left, and American Social Thought*, University of California Press.
- Gerth, H. H. & C. W. Mills, 1953, *Character and Social Structure: The Psychology of Social Institutions*, Harcourt: Brace & World Inc. (=1970, 古城利明・杉森創吉訳, 『性格と社会構造—社会制度の心理学』青木書店.)
- Gillam, R., 1966, *The Intellectual As Rebel: C. Wright Mills 1916-1946*, Unpublished M. A. essay Columbia University.
- Hewitt, J. P. & Stokes, R., 1975, "Disclaimers," *American Sociological Review*, 40 (1) :1-11.
- Horowitz, I. L., 1983, *C. Wright Mills : An American Utopian*, Free Press.
- 伊奈正人, 1991, 『ミルズ大衆論の方法とスタイル』勁草書房.
- , 2006, 「社会学的想像力再考」『地球情報社会と社会運動』ハーベスト社.
- 伊奈正人・中村好孝, 2007, 『社会学的想像力のために——歴史的特殊性の観点か

- ら』世界思想社.
- 井上俊, 1997, 「動機と物語」 井上俊ほか編 『岩波講座現代社会学 1 現代社会の社会学』 岩波書店.
- , 2008, 「動機のボキャブラリー」 『自己・他者・関係 (社会学ベーシックス1)』 世界思想社.
- Jones, R. P., 1977, *The Fixing of Social Belief: The Sociology of C. Wright Mills*, Ph. D. Dissertation of University of Missouri.
- Mattson, K. 2002, *Intellectuals in Action*, The Pennsylvania University Press.
- Mills, C. W., 1939, “Language Logic and Culture” *American Sociological Review*, vol. IV, no. 5 (October)670-680→1963 Horowitz, I. L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 423-438. (=1971, 佐野勝隆訳「言語, 論理, 文化」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 334-344.)
- , 1940a, “Methodological Consequences of the Sociology of Knowledge” *American Journal of Sociology*, vol. XLVI no. 3(November)316-330→1963 Horowitz, I. L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 453-468. (=1971, 田中義久訳「知識社会学の方法論的帰結」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 356-368.)
- , 1940b, “Situated Actions and Vocabularies of Motive,” *American Sociological Review*, vol. V (December) :904-913→1963 Horowitz, I. L. ed., *Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford University Press, 439-452. (=1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 344-55.)
- 西川珠代, 1991, 「社会学における『動機』概念の変容—ウェーバーの動機理解と『動機の語彙』論の動機付与」『ソシオロジ』36 (1) :63-79.
- 中内敏夫, 2005, 『教育評論の奨め』国土社.
- Oakes, G. & Vidich, A. J., 1999, *Collaboration, Reputation and Ethics in American Academic Life: Hans H. Gerth and C. Wright Mills*, University of Illinois Press.
- Scott, M. B. & Lyman S. M., 1968, “Accounts,” *American Sociological Review*, 33 (1) :46-62.
- Summers, J. H., 2007, “James Agee and C. Wright Mills:Sociological Poetry”

- Lofaro, M. A. ed. *Agee Agonistes: Essays on the Life, Legend, and Works fo James Agee*, University of Tennessee Press.
- , 2008, *Every Fury on Earth*, The Davies Group Publishers.
- Summers, J. H. ed., 2008, *Politics of Truth: Selected Writings of C. Wright Mills*, Oxford University Press.